

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

いまもし私たちが突然いっさいの言葉というものを忘れてしまったら、私たちの意識はタガの外れた桶のようなもので、つまり私という存在はまったく自分を規定するものがなくなってしまうわけだから、そもそも抽象作用などというものが行えるはずもなく、したがってまた表象作用などということが出来るはずもなく、道具の生産以前に逆戻りしてしまう。残っているのは柔軟なる手だけだ。その点では言語もまた私たちの意識を規定する「存在」である。しかも決定的な「存在」である。そしてこの「存在」はきわめて間接的である。

しかし言語活動そのものも、本来の発展段階にふみ入る最初のところで、物質的生産活動のあみの目の中にくみこまれていく。そのあみの目というまでもない。生産活動の中でとり結ばれる他の人間との実践的な関係である。人間の生産活動がたった一人の人間で行えるものなら、そもそも言語などというものは必要としないし、生まれもしないだろう。

言語は実践的な、他の人間たちのためにあってこそ、はじめて自分自身のためにある現実的な意識である。そして言語は、意識と同様、まず他の人間との交通の欲求、渴望から生まれたものである。

このような現実的な意識であればこそ、言語は人間の意識を規定する存在となるのであろう。その意味をうけとる他の人間の存在を前提しない言語というものはない。間接性の導入——それが人間的生産の出発点だが、その間接性をどのようにに発展させるにせよ、他の人間のためにあってこそ自分のためにあるというその本来の意味を喪失した間接性は、もはや間接性そのものとして意味をなさない。そのようなところでは、言語もまた「自己表出」としての現実的土台を喪ってしまうのである。言語は言語特有の間接性の中で独り歩きもするが、自分だけにしか通用しない言語は、イ実はその自分をすら規定してはないのである。

むろんいままでの言葉では言いあらわすことのできない感情、あたらしい意識が生み出されてきたとき、既存の言葉はもはや「自己表出」としての場とはならない。それはもうあたらしい生命をもちこむことの出来ないものだから、そのあたらしい生命にとつては死語となる。死語を語らねばならないとき、人はその言葉のなかでむなし疎外におちこむ。それは何も高級なむずかしいところだけにだけ現れる現象ではない。今日テレビなどで、つぎからつぎへとつくりだされる「新語」などは、そのむなし疎外の、しかもきわめて画一的な「生産」なのだ。その疎外からぬけだすためには、あたらしい言葉が発見されてゆかねばならない。が、その生命が果たしてあたらしいものか否かを実証するためには、その言葉自身、自らがあたらしい生きた「間接性」であることを実証しなければならぬだろう。ウその「間接性」を通して、あたらしい現実がつくり出されてゆかねばならない。他の人間たちのためにあってこそ私自身のためにあるあたらしい現実的な意識がつくり出されてゆかねばならない。その実証を放棄した「自己表出」は、それ自身、何の「間接性」の任務にもたえうるものではないのである。

(1) この『存在』はきわめて間接的である(傍線部ア)とは、どういうことか、説明せよ。【解答欄：17.8cm×2行】

(2) 「実はその自分をすら規定してはいないのである」(傍線部イ)とあるが、それはなぜか。【解答欄：17.8cm×2行】

(3) 「その『間接性』を通して、あたらしい現実がつくり出されてゆかねばならない」(傍線部ウ)とは、どういうことか、説明せよ。【解答欄：17.8cm×2行】

梅本 克己 「唯物史観と現代」

【引用者による注意】

東京大学では解答・解説・配点を一切公表していない。
この記事に記載されている解答例は東京大学が公表したものでない。
表記などについては一部、原本通りでないことがある。